市原佐都子（Q）

『バッコスの信女 ―ホルスタインの雌』

ICHIHARA Satoko（Q）

“The Bacchae —Holstein Milk Cows”

10.11 Fri – 14 Mon

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater

情の時代
あいち
トリエンナーレ
2019
AICHI TRIENNALE 2019:
Taming Y/Our Passion

© hagie K

人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉える劇作・演出家、市原佐都子。今回新たに創作される作品は、ギリシャ悲劇『バッコスの信女』(エウリピデス作)のテーマや構造を大胆に咀嚼したファンタジーだ。
一見普通の主婦、そのペットの雄イヌ、人工授精で生まれたウシと人間のハーフ、12匹の雌のホルスタインの霊魂たちによる合唱隊(コロス)。彼らが奏でるドラマは、ヒトと動物の境を揺さぶり、私たちの秘めた欲望を触覚的に刺激する。そこでは、男性／人間中心的な性や生殖行為、その価値観や道徳観念も大胆に脱臼されるはずだ。
音楽は東京塩麹／ヌトミックの額田大志が担当。2020年にはドイツで３年に一度開催される世界演劇祭への正式招待も決定。現代のデュオニュソスたちが奏でる異色の音楽劇に、世界が注目している。

Ichihara Satoko writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. Her new work for Aichi Triennale 2019 is a fantasy that liberally interprets the themes and structure from the Greek tragedy *The Bacchae* (Euripides) .
A seemingly ordinary housewife, her male pet dog, and a cow-human cross-breed born through artificial insemination, and a chorus of the souls of 12 female Holstein cows--the drama they act out blurs the boundary between people and animals, and stimulates our hidden desires in a tactile fashion. Here, the patriarchal, anthropocentric narrative of sexuality and reproductive behavior, and their associated ethics and morals are radically called into question.
Nukata Masashi, of Tokyo Shiokouji and Nuthmique, will be responsible for music. This piece has also been chosen for an official invitation to the World Theater Festival (held every three years) in Germany in 2020. The world is paying attention to the unusual musical theater produced by these modern Dionysian artists.

市原佐都子 (Q)

1988年大阪府生まれ
東京都拠点

2011年より劇団Qを主宰。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた劇作、演出を行う。女性の視点から、性や、異種間の交尾・交配などがフラットに描かれる戯曲では、観客の身体を触覚的に刺激する言葉が暴走し、舞台上の俳優たちは時に戯画的に、時に露悪的に台詞を全身から発散させる。そこでは、男性中心的、人間中心的に語られてきた性や生殖行為が無効化し、社会のマジョリティを覆っている倫理観や道徳観念にもラジカルな疑いがかけられる。

ICHIHARA Satoko (Q)

Born 1988 in Osaka, Japan
Based in Tokyo, Japan

Ichihara Satoko has led the theater company Q since 2011. She writes and directs plays that deal with human behavior, the physiology of the body, and the unease surrounding these themes, using her unique sense of language and physical sensitivity. In one of her works, themes such as sex, cross mating and breeding are clinically portrayed through the viewpoint of women; the audience is showered with physically stimulating, verbal rampages and the actors execute their lines using their entire bodies--at times in the manner of caricature, at times in the manner of confession. Here, the patriarchal, anthropocentric narrative of sexuality and reproductive behavior is invalidated, and even the ethics and morals of the social majority are radically called into question.

主な公演・受賞歴

2018 『私とセーラームーンの地下鉄旅行』韓国香港日本共同制作、南山アートセンター、ソウル(韓国)
2018 『毛美子不毛話』『妖精の問題』KYOTO EXPERIMENT、京都
2017 『毛美子不毛話』第61回岸田國士戯曲賞最終候補、東京
2017 『毛美子不毛話』韓国ソウルマージナルシアターフェスティバル招聘、ソウル(韓国)
2013 『いのちのちQ Ⅱ』フェスティバル/トーキョー公募プログラム、東京
2011 戯曲『虫』第11回AAF戯曲賞、愛知、優秀賞受賞

Selected Works & Awards

2018 *Me and Sailor Moon's Subway Trip* (South Korea/Hongkong/Japan co-production), Namsan Arts Center, Seoul, South Korea
2018 *Favonia's Fruitless Fable, The Question of Faeries*, KYOTO EXPERIMENT, Kyoto, Japan
2017 *Favonia's Fruitless Fable,* the Seoul Marginal Theater Festival, Seoul, South Korea
2017 *Favonia's Fruitless Fable,* nominated as the finalist for the 61st Kishida Prize for Drama, Kunio Playwriting Prize, Tokyo, Japan
2013 *Qlobe of Life II,* Festival/Tokyo Emerging Artists Program, Tokyo, Japan
2011 *Insects,* 11th Aichi Arts Foundation Drama Award, Aichi, Japan, Drama Award

インタビュー

市原佐都子
わけるのか、混ぜるのか。人間も、牛も、女もわからない。

聞き手: 野村政之（ドラマトゥルク）

――市原さんは、この企画が立ち上がる前からギリシャ劇に関心を持ってたんですよね。

戯曲を書いていると「この苦しみはどういう苦しみなんだろう。どういう時に人は苦しんでいたんだろう」って考えるんですよね。それで「昔の人が書いた物語を読むとわかることがあるのかな」と、ギリシャ劇を読み始めました。「この話と自分が今書いていることはもしかして似ているのかもしれない。この人物がオイディプスだとしたら、こっちはスフィンクスで……」と考えたりして。

――ギリシャ劇を参照することで、日常的なつまづきが、実はもっと大きな問題なんじゃないかと考えられるわけですね。

自分が書く物語のスケールを大きくしたいと思っていたんです。身の回りにある出来事や違和感を掘り下げて書いていることが多いんですけど、それだけだとなかなか広がりがない気がしていて。

――市原さんは以前、日常疑問に思うこと、怖いと感じることや禁じられているようなことを、想像力で書き進めることにモチベーションを持っていると言っていたけど、その違和感自体は捨てずに、世界を大きくしたかったと？

ひとつのことに執着して、その正体を知りたいと思い、そこにグッと入り込んでいくようなつくり方をしていました。その創作の衝動ややり方はいまも変わりありませんが、特に初期の頃はそれだけを大事にしていました。ただ、もう一段階自分の劇作を進めたいと思った時に、沖縄で女優の竹中香子さんと二人で『妖精の問題』という作品をつくるという体験があって、他人と思いやりを持って向き合うことを学び、そこから自分の世界が広がりました。あの時も内容としては結構危ないことを書いていたんです。ただ、それをどう出すかを考えた結果、落語、歌、レクチャーという形式を使ったことで、演出の方法にしても、自分一人ではできなかったことができているという感触がありました。だから、今回も何か形式がほしいなと考えて、前から読んでいたギリシャ悲劇を持ってきたというのはあります。

――ギリシャ劇の形式*は今回の作品でも踏襲していますよね。

そうです。プロロゴスがあり、コロスの入場曲があって、会話と歌が交互にあるというような構造を借りています。自分の発想では、なかなかやろうと思わない形式です。

わかりたい欲望とわかる寂しさ

――モチーフとして『バッコスの信女』を選んだのはどうしてですか。**

ディオニュソスは、種も性別もはっきりしない存在だから、自分が今まで書いてきたものとも繋がっているなと思った。これを動物と人間のハーフってことにすれば、面白いものが書けるかなと。

――今回のあいちトリエンナーレではジェンダー平等ということがひとつの軸になっていますよね。『バッコスの信女』は、女性についての話と捉えられる側面があると思うんですが、それは意識しなかったんですか。

女性の話という印象を私は持たなかったです。女性は狂わされていて、主役はディオニュソスとペンテウスで、その男性二人の対立の話かなと。私はその二項対立にシンパシーを感じない。だから、そうじゃないものを書きたいという欲望が湧いて。この話には、理性と本能の争いみたいな面もありますけど、「そんなキレイに分かれてるわけない、一人の人間でもどちらも持っていない？」と思うんですよね。

――なるほど。「理性と本能」とか「正気と狂気」みたいな分け方自体が、ある種男性的な見方かもしれませんからね。他方、異なる神への信仰が生む対立という面は、元のテキストから引き継がれていますよね。たとえば兵藤公美さん演じる主婦と川村美紀子さんの半獣とでは、信じているものがかなり違っていて、それが人間と動物の対立としても描かれる。その時に、デュオニュソスが人と牛の合いの子であるということが改めて重要になってくると思うんだけど、「牛」について書こうというアイデアはどういうふうにでてきたんですか。

牛は粉ミルクを飲んで育つっていう話を飴屋法水さんから聞いたことがあって。それで牛について調べたら、今回の家畜人工授精師という仕事を知ったんです。そういう仕事をしている人は、どんな恋愛をして、どんな交尾をするのかなと、アイデアが広がっていきました。牛の置かれている状況って、あらためて調べると、すごく人間本位に扱われていることがわかって。

――そうするとちょっと、牛に肩入れするようなところもあったのかな。この作品には、すごく小市民的な人物と、半人で両性具有という興味深いキャラクターが出会って議論する。そこで、牛の声や犬の声、告発を聞くことになります。

牛の気持ちは書いてないんです。自分たちがどういう状況にあるかということを、牛役のコロスに語らせているだけで。自分が牛だったらってことも考えたんですけど、わからない。たとえば、「生まれた時から食べられる運命だとわかっていたとしたら、むしろそうやって需要があることを誇りに思うかもしれない……」とかって考えるのも、人間だからできることですよね。だから、どこまでも牛が思っていることは書けない。でも、家畜も人間もなにかに囚われて生きていることでは共通しているかもしれない。牛のことを話していても、人間のことのようにも聞こえるときがある。それも、人間が勝手にそう捉えているということでしかないのですが。また、この本に登場するコロスには、牛以外の役割も大きくあって、状況や登場人物の心情を客観的に伝えています。

――加えて、この半獣には、牛だけじゃなく「人間」として生きることについて考えさせられる面もありますね。たとえば主人公の主婦は「人間である」ことを規範としてしつけをしようとする。その姿を通して、観客は「何が人間なのか」と考えると思うんです。

教育には、理性で本能を抑えるみたいな面がありますよね。人間は生まれたままではいられない、生まれただけでは人間ではない。親は子供を人間にしていかないといけない。言葉を教える。それは既存のものの見方を植えつけることになる。それは悪いことではないと思う一方で、悲しいとも感じるんです。もうわからない状態ではいられなくなってしまうわけだから。たとえばこの主婦もスマホで見られる情報を信じて、調べればわからないものはなくなるというような感覚でいますよね。他人のものの見方で世の中をわかった気になっていく。自分が欲望している対象だって、誰かにそうされているだけでしかなかったりする。たとえその真実に気づいても、もうその世界の中にいることしかできない。

――世の中は牛と人を区別して、牛をモノ扱いして動いている。だからこそ、牛乳や肉を目的として、人工授精で生を与えられるということも起こるわけで、そこには大量生産、大量消費という背景も浮かび上がってきますよね。それも

僕が、この戯曲が豊かだと思うところなんです。

この主婦はスマホで買い物するのが大好きなんですけど、それと同時にわからないものへの憧れも持っている人です。だからこそ、ネットで買った人間の精子を牛に注入しちゃう。そういう対極の欲望が一人の人間の中にもあって、ある時はこっちの面が、ある時はこっちの面が出ている、ということなんですよね。

「いいね！」だけど「いいね！」じゃない

――古代のギリシャ劇というのは、男が演じて、成年男子の「市民」を観客とした、男だけの空間だったといわれていますね。今回はそれを、女性だけの出演者、スタッフもほぼ女性という布陣でつくっていますよね。その特性をどう感じていますか。

伸び伸びしていますよね、皆。小道具のエロ本を開いて疑問に思うところを言い合ったりして。やっぱりどこか、男性が多いと嘘をついちゃう瞬間があるんです。どうしてだか、どうでもいいと思っていても。男性と作品について話す場面でズレを感じたこともあって。そこまでそこにエネルギーを割いて理解してもらう必要はないと思う。ただ違う、からです。今回はそれがないです。皆が同じ意見を持っているということではなく、それぞれなのですが、根本の身体が同じということが影響しているかもしれません。

――ギリシャ劇の空間に男性しかいなかったと考えたとき、今回の試みから何が生まれるか、きっと見るべきものがあるはずだと、僕は期待しています。「女性のみの出演者にする」というのは、今年1月に城崎国際アートセンターで滞在制作をする際に決めたことでしたよね。まだ戯曲の執筆中でしたが、変に男性を混ぜるより、割り切ったほうが作品づくりがふくよかなものになるのではと思いました。

私は自分が思っていることがいちばん強い表現だと思っているんですよね。そのまま自分の主張を書くと言う意味ではなく、自分の感情を掘り下げてそこから表現を産み出す。自分に内にある暴力性など、見たくない部分も見ることになる。だけど嘘をつくことをしたくない。自分に内在するものをできるだけ可視化したうえでないと、他人のことも認めたり深く対話することができない気がするので。演劇の土台は虚構、だからこそ発せられる普段は発せない言葉があると思います。でも、ある一方の世界だけでなく、反対側のことや、ある種の希望を描くことも最近は意識しています。なので、自分のことを掘り下げると自然と女性のことを書いていた、ということなのかもしれない。私の場合、最初に作品を発表した時から、「女性の作家」といわれてきたんですけど、自分ではそれを意識していたつもりはないんです。いつも後から意識させられてきた。女性って自分の身体が生物学的に女性であることを意識する以上に社会から「女性」であることを意識させられる。それに、女性しか出ていないというのも、そんなに特別なことではないですよね？

――もしかすると、市原さんのような目線で物事を見ている女性は結構たくさんいるということに過ぎないのかもしれないし？

前に「男のことが嫌いな女に好かれる作家」と言われたことがあるんです。「少数派に好かれてるだけだ」ってニュアンスでした。別に少数派でもよいのですが、その男性の上から決めつけるような言い方が最初は「嫌だな」と思ったんです。だけど考えてみると、「私、多数派じゃん！人気者じゃん！」と。だって、SNS見てても、周りを見ても、男性が苦手な人多いですから。なんだろう、たとえばゴツい男性が隣にいるよりは、女性専用車両がいい、みたいな。大なり小なりそういう身体感覚はあると思うんです。

――今の社会では、男が全員の空間と、男女半々の空間に、男性はそれほど違いを感じない。でも女性にとっては、全員女性の空間と男女半々の空間は相当に違うのではないか。その非対称性みたいなものは、きっと、この作品にも反映されるんじゃないのかな。僕自身はそこをわかったつもりにはなれないし、だからこそ、自分がインタビュアーであることに、若干の不安もあるんだけど……（笑）

みんながまったく同じように苦しいことってないじゃないですか。Twitterとか見てると「女、ツラい」みたいなツイートがいっぱいありますよね。それに「いいね！」したい気持ちもあるけど、一方で「いいね！じゃない」って気持ちがせめぎあう。さらにそれを批判的に見ることもできるし……だから何も女で固まることもないし、男女問わずいろんな反応が見てみたい。作品について稽古場でよく話し合いますが、人によって捉え方が違い、劇の結末に対しても何通りも読み方があり、それぞれが興味深いと感じながら創作しています。

＊ 紀元前5世紀ごろの形式は、序章にあたるプロロゴスに始まり、合唱隊（コロス）による入場歌のあと、会話部分のエペソイディオンと歌舞によって表現されるスタシモンが繰り返され、最終章のエクソドスに至るというもの。また俳優の数は3人で、これにコロスが加わる。

＊＊ 紀元前5世紀の劇詩人エウリピデスによる悲劇。ゼウスと人間の子であるディオニュソス神と彼を迫害するテーバイ王ペンテウスの対立とその顛末を描く。ペンテウスに怒ったディオニュソスはペンテウスの母を始めとするテーバイの女たちを狂乱に陥れ、山中で祭儀をさせる。それを覗き見したペンテウスは、女たちに獣と間違えられ、八つ裂きにされてしまう。

城崎国際アートセンターでの滞在制作中に行なった一般参加者との合唱WS
写真提供：城崎国際アートセンター

森下スタジオでの稽古風景

Text, Direction: Satoko Ichihara

Performers: Mikiko Kawamura, Ayane Nakagawa (Suichu-megane∞),
Yurie Nagayama (SEINENDAN), Kumi Hyodo (SEINENDAN)
Eri Liao, Omi Yuki, Tomoko Katsuta, Maika Koguchi,
Kanako Shiozawa, Seira Nakanishi, Miuko Hagiwara, Shino Fujimoto, Saki Mishima, Kyoko Murakami, Satomi Watanabe, Harumi Watanabe

Music: Masashi Nukata (Tokyo Shiokouji / Nuthmique)
Sound Mixed: Hiraku Someno
Stage Design: Tomomi Nakamura
Lighting Design: Rie Uomori (kehaiworks)
Sound Design: Takeshi Inarimori
Movie: Kei Urashima
English Subtitles: Aya Ogawa
Stage Manager: Kentaro Sakurai
Advertising Design: Rui Hiramatsu
Illustration: hagie K
Dramaturg: Masashi Nomura
Production Coordinator: Makiko Yamazato
Special cooperation: Hiroko Okada
Support: The Saison Foundation

Technical Manager: So Ozaki
Video Documentation: Daisuke Yamashiro
Photography: Shun Sato

Curator: Chiaki Soma (Aichi Triennale 2019)
Production Manager: Sayuri Fujii (Aichi Triennale 2019)

Production: Aichi Triennale 2019, Q
International Co-production: Theater der Welt 2020
Production Co-operation: Kinosaki International Arts Center (Toyooka city)

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co- Presented by Aichi Prefectural Art Theater

作・演出：市原佐都子

出演：川村美紀子、中川絢音（水中めがね∞）、永山由里恵（青年団）、兵藤公美（青年団）
Eri Liao、オミユキ、勝田智子、小口舞馨、塩澤嘉奈子、中西星羅、はぎわら水雨子、藤本しの、三島早稀、村上京央子、渡邉智美、渡邊悠視

音楽：額田大志（東京塩麹/ヌトミック）
音楽ミキシング：染野 拓
舞台美術：中村友美
照明：魚森理恵（kehaiworks）
音響：稲荷森健
映像：浦島啓
字幕翻訳：Aya Ogawa
舞台監督：櫻井健太郎
宣伝デザイン：平松るい
イラスト：萩原慶
ドラマトゥルク：野村政之
制作：山里真紀子
特別協力：岡田裕子
カンパニー助成：公益財団法人セゾン文化財団

技術監督：尾﨑聡
記録映像：山城大督
記録写真：佐藤駿

キュレーター：相馬千秋（あいちトリエンナーレ2019）
制作統括：藤井さゆり（あいちトリエンナーレ2019）

製作：あいちトリエンナーレ2019、Q
国際共同製作：テアター・デア・ヴェルト2020（世界演劇祭）
制作協力：城崎国際アートセンター（豊岡市）

主催　あいちトリエンナーレ実行委員会
共催　愛知県芸術劇場

THE SAISON FOUNDATION
城崎国際アートセンター

「あいちトリエンナーレ2019」パフォーミングアーツ
AICHI TRIENNALE 2019 / Performing Arts

キュレーター Curator
相馬千秋 SOMA Chiaki

アシスタントキュレーター Assistant Curator
藤井さゆり FUJII Sayuri

コーディネーター Coordinator
清水翼、村松里実 SHIMIZU Tsubasa, MURAMATSU Satomi

テクニカル・ディレクター Technical Director
尾﨑聡 OZAKI So

票券 Ticket Administration
山﨑佳奈子 YAMASAKI Kanako

翻訳 Translation
Art Translators Collective
（相磯展子、ペン・ケーガン、リリアン・キャンライト）

Art Translators Collective
(AISO Nobuko, Ben CAGAN, Lillian CANRIGHT)

編集・執筆 Editor/Writer
鈴木理映子 SUZUKI Rieko

編集：鈴木理映子
デザイン：コバヤシタケシ（SURFACE）
印刷・製本：藤原印刷

あいちトリエンナーレ2019 情の時代
2019年8月1日［木］－10月14日［月・祝］

主な会場：愛知芸術文化センター、名古屋市美術館、名古屋市内のまちなか（四間道・円頓寺）
豊田市（豊田市美術館及び豊田市駅周辺）
芸術監督：津田大介（ジャーナリスト/メディア・アクティビスト）

主　催：あいちトリエンナーレ実行委員会
助　成：損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」（企業メセナ協議会 2021 Arts Fund）
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド
一般財団法人地域創造

AICHI TRIENNALE 2019: Taming Y/Our Passion
August 1 (Thursday) to October 14 (Monday, public holiday), 2019

Main Venues: Aichi Arts Center, Nagoya City Art Museum, Nagoya City (Shikemichi and Endoji)
Toyota City (Toyota Municipal Museum of Art and other venues in the vicinity of Toyotashi station)
Artistic Director: TSUDA Daisuke (Journalist / Media Activist)
Organizer: Aichi Triennale Organizing Committee
Supported by Sompo Japan Nipponkoa Insurance Inc.「SOMPO ART FUND」(Association for Corporate Support of the Arts, Japan:2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture), Association for Corporate Support of the Arts, Japan: 2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture, Japan Foundation for Regional Art-Activities

beyond 2020